NEJM Journal Watch General Medicine の紹介　　No. 33

１）
担当：小林祥也

題： 抗凝固薬の種類が心房細動と糖尿病を有する患者の予後に影響する

結論： 直接経口抗凝固薬(DOAC)はワルファリンに比べ、糖尿病に関連する合併症の発生率や死亡率を低下させる

原題：Huang H-K et al. Diabetes-related complications and mortality in patients with atrial fibrillation receiving different oral anticoagulants: A nationwide analysis.
Ann Intern Med 2022 Feb 15; [e-pub]. (https://doi.org/10.7326/M21-3498)

本文：ビタミン K 拮抗薬はインスリン感受性を低下させ耐糖能異常を来すと研究報告されてきた。そのため、心房細動をもつ患者でワルファリンを内服している患者の方が DOAC 内服している患者より糖尿病に関連する合併症を起こしやすい。ある台湾での国際的なデータベースを利用したコホート研究では、研究者はプロペンシティ・スコア・マッチングした 3 万人以上を対象にした。対象患者の平均年齢は 74 歳で平均観察期間は約 3 年である。糖尿病と心房細動を罹患した対象のうち、約 2/3 が DOAC を、約 1/3 がワルファリンを内服していた。その結果として、ワルファリン内服群に比べて、DOAC 内服群では優位に大血管イベント(冠動脈疾患、脳卒中、あるいは末梢動脈疾患)や、微小血管イベント(網膜症、腎症、神経症、透析あるいは下肢切断)の発生率がそれぞれ 12%(ワルファリン群 14%)、36%(ワルファリン群:45%)と低かった。また、糖尿病性ケトアシドーシスや高浸透圧高血糖症候群、低血糖の発生率、死亡率も DOAC 内服群で低かった。

コメント(Daniel D. Dressler MD, MSc, MHM, FACP)
本研究は 2012 年から 2017 年の期間のデータを使用しているため、現時点ではもっと多くの患者がワルファリンより DOAC にて治療されている。そのためこの結果は、いかなる高リスク患者においても糖尿病の合併症を減少させることが期待される。

２）
担当：園山隆之

題： 偶発的に発見された胆嚢ポリープの自然史

結論： 偶発的に発見された胆嚢ポリープは、時間経過で大きさや個数が増減する

原題：Walsh AJ et al. Longitudinal ultrasound assessment of changes in size and number of incidentally detected gallbladder polyps.
AJR Am J Roentgenol 2022 Mar; 218: 472.

本文： 胆嚢ポリープは腹部の画像検査において、比較的よく見られる偶発的な所見である。
その多くが非腫瘍性のコレステロールポリープであり、少ない頻度ではあるが、腺腫性ポリープや胆嚢癌であることもある。胆嚢ポリープの自然史を調べるために、スタンフォード大学研究者達は、肝癌スクリーニングプログラムにおいて、腹部超音波検査を受けた 10000 人の患者のデータベースを利用した。胆嚢ポリープは 759 人(8%)において、少なくとも 1 回の超音波レポートに認められた。
これらの症例の検査結果は以下の通りである。

・約 40%が初回の検査で 2 個以上のポリープを認めた。
・多くのポリープが 6mm 以下であったが、3%の患者において 10mm 以上のポリープが少なくとも 1 つあった。
・複数回の検査を受けた（平均 5 回）患者 434 人において、9%がポリープ数の増加を認め、14%が減少、増減があったのが 22%であった。加えて最大径のポリープにおいてはサイズの増大を認めたのが 10%、縮小が 16%、増大、縮小両方認めたものが 18%であった。
・19 人が胆摘を受けたが、癌は認めなかった。

コメント: 胆嚢ポリープはその数やサイズにおいて、経時的に増減がある患者の割合が大きいということは新たな知見である。筆者らはこの研究が、コレステロールポリープの自然史を反映しているものと考えており、いくつかは変性し、その後「再生」している可能性がある。
どのくらいの頻度で繰り返し超音波検査を受けるのか、また胆摘が必要とされるほど悪性腫瘍を強く疑う場合の推奨度がガイドラインによって異なっている。この研究は将来のガイドラインの改訂に有用な情報を提供している。